

仏教と話芸

——交感の真宗——

羽塚孝和

はじめに

はじめまして。名古屋から来ました羽塚と申します。学長先生からお話があったんですけれども、日本の話芸の源流が、浄土真宗のお説教にあるんです。「話芸」という言葉は、使われ始めて、実は四十年くらいしか経っていません。関山和夫という先生が、初めてこの「話芸」という言葉を創り出されたんです。講談とか落語とか浄瑠璃とか漫才とか、日本の話芸はたくさんありますが、それらはほとんどいい

ほど、浄土真宗の「節談説教」せつだんというお説教からきています。

こういう説明だけではなかなか現代の人には納得して頂けませんので、まず三つか四つ、日本の「話芸」の中のさわりの部分をちよつとやってみます。

色好まざるは玉の盃 底なきがごとき

赤い小袖に迷わぬ者は 木仏きぶつ・金仏かなぶつ・石仏いしほとけ

千里行くあの汽車でさえ 赤い旗出しゃ ちと止まる

一宗開いた日蓮さんでも 少しや女にほれたためしがある

南無妙法蓮華経 と書いた 七字の跳ね題目

上から三つ目の「妙」という字を ご覧なさい

女扁に少しと書いてあるではないかいな

なんぼ日蓮上人でも 少ししゃ女にほれんげきよう

ようおこしやす

仏教と話芸

昔、砂川捨丸さんと中村春代さんが漫才をするときに、最初にこれをしていました。まさしくこれは、浄土真宗のお説教そのものなんです。それから、狂言はこういう口調なんです。

これは、このあたりに住まい致す者でござる

それがし、樹木じゆもくを数多あまた持つて、御座るが

当年な、柿が大なりにいたいて御座る

柿というものは、人の採りたがるものによって

ちと、見回りに参ろうと。存ずる

まずは、そろりそろりと参ろう

これが狂言の口調です。浄瑠璃になりますとこういう口調です。

今頃は 半七さん、どこで どうしているのやら

こういう口調が浄瑠璃です。落語になりますと、NHKのドラマ「ちりとてちん」の中で、最初に落語の人が練習する落語に「東の旅の発端」(正式名は「伊勢参宮神乃賑」というのがありまして、それはどういうものかと言いますと、こういう調子なんです。

ようやくと上がりました、私しが、初席一番叟でござります。お次が、二番叟、三番叟、四番叟、ご伴僧、お住持に、幡に天蓋、銅鑼に、鏡鉢、影灯籠に白張と、こない申しますと、これは、葬礼の方で御座ります。なんや、上がるなり、葬礼の事を、申し上げるのは、駿の悪い奴とお叱りも、御座いませうが、決して駿の悪い事を、申し上げたつもりは、御座いませぬ。むしろ、駿の良い事を、申し上げたつもりで御座います…

こういう調子(七・五・三に叩き分けながらのリズミカルな喋り口調)で、この落語は始まるんですね。浄土真宗のお説教には、「五段法」という、五つの段階があり

仏教と話芸

まして、最後の結論の部分（結勸^{けっかん}）が、こういう調子であります。

今も 丁度その如く 大悲の親の淋しい心の その中に 働きどおしや 呼びどおしや 肉体は無いけれど。眞実の親心として 拝む気のない心の中に 念仏を称うる気の無い心の中に 一度は手を合わせてやりたいわんや 念仏称えさしめやりたいと 働きどおしが 大悲の親 大悲の親のまことが 胸に頂かれたればこそ 心に頂かれたればこそ。気のない私めが 両手あわいて 拝ましめもらい行き場のないこの口から 今日^{ひょうじん}は一声なりと 南無阿弥陀仏と 称えさしめもらうらうのは 我が力ではない 我がはからいではない。一度はとの 親心があったればこそ…

いま、日本の話芸のサンプルをいくつかやりましたけれども、全部に共通してる点が一点あるんです。

生活の中にある節まわし

それは何かと言ったら、「二字起こし」と言いますけれども、日本語の話し言葉の中で、二つ目の文字を上げると、感情移入がしやすくて、聞いてる人にも気持ちがいいんですよね。ほとんど日本の話芸は、これなんですよ。「これはこのあたり」の「れ」、「住まい致す者」の「ま」、上から二つ目の文字を挙げると、気持ちよく聞けるんですね。

私はあんまりテレビを見ませんけれども、八時台にトレンディドラマがたくさんありますよね。そのトレンディドラマの演出家に鴨下信一さんという方がいます。その方によると、八時台のドラマだとスポンサーの関係でアイドルを使わないといけない。アイドルははつきり言ってあまり上手じゃない。そういう人達を特訓する場合には、この「二字起こし」を教えるんです。そうするとメキメキ上手になると。そういうこともあって、話し言葉の中で二つ目の文字を上げると、非常に気持ちがいい。浄

仏教と話芸

土真宗のお説教の中にもたくさんそういうのがあります。

先ほど、学長先生がおっしゃいましたが、日本の演歌の源流も、お説教なんです。どういふことかと言ったら、お説教には「せり弁」という手法があるんです。だんだんせり上がってきて、せり上がったところからダーンと節に入ります。今の演歌とか歌謡曲とかみんなそうですね。石川さゆりさんの「天城越え」。あれもだんだん上がっていったって、上がったところでガンと入る。僕らの学生時代に、欧陽菲菲という歌手がいました。みなさんご存じないと思いますけれども、「雨の御堂筋」なんてまさしく「せり弁」なんです。音楽もそうですね、スメタナの作った「モルダウ」という交響詩がありますけれども、あれも小さな川の流れから大きな大河になって、大西洋へ注いでいく。最初は小さな声で、一番誇張したところでガンと節に入りますよ。お説教もやっぱりそういう感じで、だんだん上がったところからガンと節に入るんですね。節をつけ、リズムをつけると頭の中に入りやすいんですね。一回聞いたならそれが忘れられないんです。

水泳の競技会でアナウンスがありますよね。「第一のコース、山本く〜ん、じか〜ん：」という感じでアナウンスありますでしょ。あれを聞くと何か水泳をやってるなという気になっちゃう。お相撲だってそうですよ。「はっけよい のこったのこった。」こういう口調でやりますよね。他にも、僕らの小さい頃は旅行に行きますと、電車のアナウンスにもリズムがあつたんですよ。今日、名古屋から新幹線に乗ってきましたら、「次は京都でございます」っていう硬い感じだけでも、昔は違いますよね。京都へ着きますと「きょうと〜、きょうと〜、山陰本線乗り換え：」というような口調でアナウンスがあつたんですよ。あれは、全部に節がかかっています。お弁当だって、「べんとう〜、べんとう〜」という感じで、駅弁を買ったもんです。

昔は、節の中で、リズムの中で生活してたんです。リズムを聞くと、実際の内容は入らないにしても、それが頭の中に残るんですよ。皆さんも、九九をリズムで覚えましたがよね。年代を覚える時にも「いい国つくった頼朝さん」とか、リズムをつけて覚えてますよね。リズムというのは人間の感性に訴える、五感に訴えるということで、それが頭の中にフツと入るんですね。実際の内容は入らなくても、節は耳に残っ

仏教と話芸

ちゃう。カラオケでも、歌詞はテロップで流れますが、五線譜は出ませんよね。リズムはだいたい一回聞くと覚えちゃうんですね。そのリズムに乗って、真宗の教えも人々に伝わっていったんです。

教えの伝わり方

今日は宗教講座でございますけれども、真宗の教えが優れているということではなくて、それがどう伝わっていったか、ということをお話したいと思います。

日本の歴史をみますと、奈良時代に行基という方がみえました。全国で井戸を掘ったり、池を作ったりしましたが、いま行基が開祖の宗派というものはないですよ。それは、行基さんの教えを宗派としては伝える必要がなかった、ということだろうと思います。また、一遍上人という方が中世におみえになります。一遍上人は、ほとんど自分で書いたものはないんですけれども、全国を歩かれて、お念仏の尊さを説かれました。だからいま、一遍上人の流れを汲む時宗という宗教教団が藤沢の遊行寺とい

うところにありますけれども、ただ個人の問題として高い宗教性を持っても皆に伝わらなければ、一つの教団になり得なかったはずです。浄土真宗はそういう意味において、今日こういう形で全国に広まっているということは、歴史的に蓮如さんとかいろんな人が出まして、分かりやすい形となって教えが広まっていったということが、大きな要因ではなかったかと思えます。

いま僕らは、標準語で話せば、全国津々浦々で言葉が通じると思っておりますが、つい少し前までは方言のみの世界ですから、鹿兒島弁と秋田弁が喋ったら絶対に通じません。僕らの学生時代に鹿兒島から来た子がいましたけど、鹿兒島弁でベラベラやられたらさっぱり分かりませんでした。そういう時代に浄土真宗の教えを伝えるにはどうしたかという点、それは蓮如さんがおっしゃるように、節譜をつけてやるんです。『正信偈』も特殊な読み方をしますよね、抑揚をつけて。『御文』も同様に特殊な読み方をして節をつけますよね。音楽でしたら日本全国の共通語として通じるわけです。年末のイベントでベートーベンの「第九」の合唱をやりますよね。たいていドイツ語でやりますよね。ほとんど私はドイツ語がわかりませんが、リズムを聞くと

仏教と話芸

何か新しい年がやってくるなっ、という感じがしますよね。米朝さんの息子さんの小米朝さんが、この間ラジオで言っていたのですが、そのベートーベンの「第九」のリズムと日本の話芸のせり弁のリズムが、ピッタリと合うんです。リズムというのは生活の中にすつと入ってくる。心の中にパツと飛び込むんですよね。そういう形のお説教が、浄土真宗の中で伝統的に受けつがれてきたんです。

昔のお説教師は、一生懸命やっただんですよね。この間、能登の廣陵兼純ひろかげんじゅんという節談説教の先生の御自坊に行っただんですけれども、話を聞きますと、昔は、三十日間連続してのお寺での行事（法要）があつたそうです。朝昼晩夜と四回勤行があつて、それぞれお説教があつたんですよ。三十日間、一人の講師（説教者）の人が、十分か十五分の話ですが、連続二〇〇回のお説教をしたんです。大学の先生でも、二〇〇回連続して話せと言ったら恐らく話せないと思うんですよね。皆さんにわかりやすい形として、皆さんが納得しやすい話を二〇〇回連続してやれと。これは並大抵の努力じゃできないですよ。それを昔のお説教の人はやっただんですよね。今みたいに、御法礼が一回いくらと決まっています。そのときに聞きに来た人の数によって、お寺の収入

も、お説教の収入も、全部違ってくるんです。ですから、やる方は真剣です。そういう風土の中から、浄土真宗の教えが一般の人に伝わっていったんですよ。蓮如上人の吉崎御坊に何万人の人が来たという記録があるんですけど、私は、最初に「これはウソだろう」と思ったけど、本当に信仰があるとそれだけの人がたくさん来るんです。お説教を楽しみに聞きに来たんですね。やる方も、一人来るより十人来るほうが実入りがいいですから、真剣です。ただし、あまりにも熱心すぎたから、大衆芸能と一緒になくなってしまって、ちよつと墮落したという部分が、なきにしもあらずです。

ある先生が、明治の頃のお説教師の記録を分析しまして、ひと月でいくらぐらい収入があったかを計算したんです。あるお説教師なんか、ひと月で、今のお金に換算すると二千万くらいあったというんですよ。昔のお説教師の中には、ものすごい収入があった方がおられたんですよ。それほど、やる方も頑張っていました。

そういう風土の中から、節説教というのは代々語り継がれてきて、つい七十年くらい前までは、お説教と言ったら、全部、高座の上でやるお説教でした。黒板に字を書いてやるような、学校の授業のようなお説教なんて全然ありませんでした。今はも

う、読み書きはほとんどの人ができますけれども、昔、読み書きのできない人たちが多かった頃には、お説教によって、真宗は人々に伝わっていったんです。

お説教の「五段法」と落語の構成

皆さん落語の「じゅげむ」を知っていますか。「じゅげむ」は漢字で書きますと、「寿命無」と書きます。これは寿の下に「命」という字が略されていて、「寿命限り無し」なんです。もちろん私たちの寿命じゃないです。仏様の寿命は限りないという意味です。「じゅげむじゅげむ…」というフレーズは有名だと思いますが、その前の話があるんです。

子どもが生まれた親が、お坊さんに何か縁起の良いお名前はありますか？と聞きに行くわけです。するとお坊さんが、『観無量寿経』にはこういうことが書いてある、こういう経典にはこういうことが書いてある…』ということの説明しながら、じゃあこの「じゅげむじゅげむ…」はどうだということ、その落語は始まるんですよ

ね。

このように、落語には最初に枕というものがあります。それからストーリーがあつて、最後にオチがありますよね。一方、お説教には「五段法」という型があります。最初は「御讚題」と言つて、経典とか「御文」とかを尊い口調で読み上げます。そして「御讚題」を簡単に説明する「法説」。次に、その「御讚題」と「法説」の部分、わかりやすく皆さんに聞いて頂くような「譬喩」と「因縁」があります。最後に「結勸」という結論の部分があります。

落語の枕の部分が、お説教の「五段法」で言うと、最初の「御讚題」と「法説」に当たります。まん中の面白い部分が、「譬喩」とか「因縁」の部分になります。落語の最後のオチが、節談説教では「結勸」という部分になるんですよ。簡単に言つてしまえば、こういう構成の説教の中から面白いところだけを残すと落語になります。節の部分を残し、語りの部分を抜いちゃうと浪花節とか講談になるわけです。

ですから、だいたい、お説教というものは七、八割は無駄なことを言っているわけです。だけど、最後の五分とか三分とかでバチッと決めると、そのお説教がピシッと

仏教と話芸

決まるんですよ。オリンピックの体操競技なんかでも、最後にピシッと決めると、「ああ、上手い上手い」となります。途中でどれだけ完璧な演技をしても、最後に足が乱れたら、「ああ、あれはへたくそ」となっちゃう。お説教も最後にピシッと決めると、「ああ、今日は上手いこと聞いたな」ということになるんですよ。そういうテクニックをお説教では持っているんです。お説教と落語というのは非常に近いんですけれども、説明だけでは皆さんに納得してもらえないでしょうから、今日は落語と、私が一番好きなお説教をちょっとやってみたいと思います。

まず、「蒟蒻問答」という、日本の古典落語の中では一番優れている落語じゃないかと思うんですけれども、その落語の枕の部分の部分をちょっとやってみます。

落語「蒟蒻問答」

宗論は、どちらが負けても釈迦の恥ということを、まあ古い川柳がございませうけれども、昔はうちの宗旨の方が、有難いなどと言って、お坊さん同士で、いがみ合うたもんでございます。まあ、多少教えは違っておりますけれども、本を正

せば、お釈迦様でございます。どちらの宗旨が有難い、有難くない、などと言う事は無いわけでありませうけれども、我田引水と言いましょか、オレの宗旨のほうがありがたいなどと、昔はお坊さん同士で討論になりました。それを問答と言います。

ある時に越前永平寺と鶴見の総持寺の若いお坊さん同士が議論になりました。相当、もめたそうで御座いますけれども、御宗旨が曹洞宗ということで、もめるのも当然かもしれませんけれども。

だいぶ以前に越前永平寺に芭蕉翁おきなというお方が、参詣なされました。境内で五、六人の若い坊さんが、固まって無駄話をしておりました。中に一人芭蕉を見知った者が、

「おい、ご覧ご覧、あれが有名な俳句の方では偉いと言われる芭蕉という男や」

「どの男や」

「あの男か」

仏教と話芸

「あの男けしからん男やなあ」

「なんでや」

「だってあの男、仏に対して礼もしない。芭蕉という男は無礼千万の大馬鹿野郎だ！」と大きな話し声が芭蕉の耳に入ったとみえまして、芭蕉がそちらを振り返りまして、

「^{ほとけ}仏とは極楽道のかかしかな」

並みいる坊さんがビックリ仰天いたしましたして、中に一人芭蕉の方に近づきまして、

「あなた様は、なぜ仏をば、かかし」と罵られるのですか」

と訪ねられた時に翁、扇面を取り出して、

「開けば三覚、これ三界、すほめば、これ一本、これ一片。涼風を忘れたもうな、いつまでも」

と扇^{あお}がれた時には二の句が告げませんでした。

「あなた様は、それほどの悟りの境地であるならば、なぜ清僧におなりになりま

せぬか」

と言われた時に、翁ニツコと笑って

「夷狄を離れて禽獸に及ぶ。古池や蛙飛び込む水の音」

と言って、飄然^{ひょうぜん}と立ち去られたのであります。

これが「菟蕪問答」の枕の部分なんです。すごく格調高いでしょう。仏教のことを知ってなきや、「菟蕪問答」はわからないんですよ。昔の人は、そういう仏教の知識をちゃんと知ってみえたんです。それは学校の授業で覚えたわけじゃなくて、お説教で聞き慣れているんですよ。

お説教だと、この枕にあたる部分を「御讚題」と言って、いろんな經典等の文章から節譜をつけてやるんですよ。例えば、

それ、南無阿弥陀仏と申す文字^{もんじ}は、その数わずかに六字なれど

さのみに功能^{くんのう}あるべきとおほえざるに、この六字の名号^{みょうごう}のうちには

仏教と話芸

無上甚深じせんじんの功德利益りやくの広大なること さらにそのきわまりなきものなり

されば信心をとるというも この六字のうちにもれりとしるべし

さらに別に信心とて 六字のほかにはあるべからざるものなり」と

只今の「御讚題」は 本願寺八代目 善知識 蓮如上人が、数々の御文をご製作
あそばされたその中に五帖目、第十三通、有名な（六字名号）「無常甚深」の御
文として：

という感じで「御讚題」と「法説」が始まります。「御讚題」の最後は、必ず「と」と言うんですよ。「これとあれ」の「と」じゃないです。長い經典の一部分で、まだ後に文章が続きます、だけどそこで一応切りますよ、「等」という意味です。「と」というのは、節談説教では、必ず入る決まり文句です。これがお説教で言う「御讚題」と「法説」の部分で、落語で言いますと、枕の部分です。

次に、「菟藟問答」のストーリーの部分をおよそとだけやってみます。

上州安中に菟蕪屋六兵衛と申します。江戸では親分、兄いと呼ばれた相当な顔役でございましたけれども、何かの間違いで江戸では住めなくなり、今では田舎に引つ込みすっかり堅気になっております。とは申せ、江戸の親分、兄いと、いろいろな人が訪ねて参ります。世話するのが嫌いじゃございませんので、ひと月、ふた月面倒を見てたたせておったわけであります。

「おい、ハチ！ちよつとこつち来いや」

「ええ？」

「お前そこに座れや」

「ええ？」

「お前はいつまでもうちに来てブラブラして、もうかれこれ二ヶ月になるわ」

「そうですね、もう二ヶ月になりますかなあ」

「どうだ、小遣いはいくらでもこさえてやるから江戸へ帰ったらどうだ、江戸へ」

「江戸へですかあ？ こつちは借金だらけで飛び出して参りましたし、頭の毛もまばらになって、こんなことじゃ申し訳ないから、もうしばからくこちらで厄

仏教と話芸

介になるわけにはまいりませんか」

「いや、世話するのが嫌というわけじゃないけどな。田舎というのは物堅いもんで、あの家には風来坊がいるということになると評判が悪いから、お前何か落ちてこうと思つたら何か商売、商売。何か家業があればぐずぐず言われることはないからな」

「商売ですか？ 何かありますかかな」

「これといってアテはないけどな。どうだ、そうだ、うちの蒟蒻屋手伝え、蒟蒻屋」

「蒟蒻屋ですかあ？ 蒟蒻なんぞ面白いこと何もありませんがな。何かオツな商売ないですかな。ちよつとこざつぱりなナリをして、村中見回って、百姓を脅かして、銭が儲かって、女にモテてしょうがないっていう商売ないですかな」

「そんな贅沢な商売があるかいな」

「でもね、あんまり骨の折れる仕事はあきません。楽な仕事、楽な仕事」

「楽な仕事か…、ああ、思い出した。お前、この先に楽王寺という寺がある。前

住が亡くなつて跡目がなくて権助が一人でおる。どうだお前、坊主になれ、坊主に」

「坊主ですかあ？ 坊主でしたらお経の一つでも読めなきや」

「お経なんぞいいが。お前、いろはにほへと、くらい言えるだろうが、いろはにほへと」

「いろはにほへと、くらい言えますがね」

「それをお経のようにやればいい、お経のように」

「どんなふう」

「まあ、本当に手間のかかるやつぢやなあ。節をつけて鼻に抜かせばいいのよ。

聞いとれよ。 ㇿいゝろゝはゝにゝほへとゝ ちりぬるをゝ わかよたれそつねならむゝ どうや、お経のように聞こえるだろう」

「そんなお経聞いたことないですよ」

「どうだ、これで短い言うたら「ㇿ千の風」かなんか歌ってみろよ。お経が短いゆうたら、お経のさわりの部分だけやりましたって言うわけ」

仏教と話芸

「お経のさわりなんか聞いたことないですが、そんなことよろしいですか。まあ、物事は融通ですから、じゃ、ま、一つ頼みます」

さつそく世話人に聞いてみますると、是非その方にお寺の住持になって欲しいということ、この八五郎がこの樂王寺の坊主になりました。何せこんな野郎でございませうから、行いすまして衣なんぞ着てなくて、朝から酒を飲もうと、まあそういうこととございまして、本堂と庫裏の間で、酒盛りが始まりました。

「ああ、もう飲んだ飲んだ、これ以上飲めん」

「もうちよつと飲みな」

「もういい、もういい」

「たのも〜！たのも〜！」

「待て待て。おいおい。玄関で、誰か頼もう頼もう言うてるわ」

「あははっ、ありがたいや。前祝いしたから葬式が来よつた。葬式が。ちよと和

尚さん、行って来ますので、待ってて下さい」

「どうも、なんだあんな坊さまか」

「ええ？」

「坊さま、寺に来たら共食いや。何か用かね。何だね」

「愚僧は、越前の国永平寺沙弥托善しゃみたくぜんと申す。諸国行脚の雲水の僧でござりまする。門前を通りし折に、戒壇石かいだんせきに「不許葷酒入山門くんしゆさんもんにはいるをゆるせず」とあり、まさしく禪家の御寺と心得え、修行のために一問答致したく、推参致しました。宜しく御取りなしを」

「何だって？ 問答の坊さまけ？ ちょっとくら待ってけれ、今聞いて来るべ」

「和尚さん、和尚さん！ 大変大変だ。エライことが起こってまった」

「なんだなんだ、葬式か」

「葬式じゃねえ。一善飯くわして、般若はんんにやの面をかぶって歩いてる」

「般若の面？ 何だそりゃ」

「般若の面 鮎屋だ 鮎屋だ 上げて踊らせろ」

仏教と話芸

「馬鹿な事を言わねえもんだ。鮎屋でねえ、問答の坊さまだ」

「何だ、問答の坊さまというのは」

「向こうで、何とかにかねって聞くんだ」

「オレにか？ あんたに？」

「あんたが、何とかに、何とかの、如し、って答えるんだ。答えなきやあんたの負けだ。頭ぶったたかれる。唐笠一本で寺をおっぴらく」

「何だ、寺をおっぴらく。オレが追い出されるのか？ 冗談じゃねえ。うちでは今やりません、って断れ」

「そりやダメだ。玄関の所にでかい石があるべ。あれはいつでも問答をぶちますって看板みたいなもんだ」

「冗談じゃねえぜ、そんなことワシ知らねえがや。はやく教えよ、そんなこと。どうしたって？ え、聞いてくるって？ ドジだな、お前オレのネタ知ってるがな。こっちは、いろはにほへとだわ。そんな問答出来るわけねえがな。じゃええ、このままこの、坊主頭で出ていったら、カッポレ屋が休んでると思われる。」

どうせ野郎はオレの顔知らねえから、衣だせや 適当に断ってくるわいな」

「あんた何だね、問答の坊さまけ？ 何だね」

「これはこれは、和尚様でござりますか。愚僧は越前の国永平寺沙弥托善と申します雲水で御座います。修行の為に一問答願わしゅう心得、推参つかまつりました、よろしく御取りなしをお願いつかまつります」

「あいにくなんだけど、今留守なんだわ、うちの和尚」…

こういう感じで落語の「菟藟問答」は続きます。時間がないのでカットしますが、いよいよ禅宗の坊さんと菟藟屋六兵衛さんのやりとりが始まるんですよ。その最後のオチの部分をちょっとだけやってみます。

旅僧は高慢な顔をして、答礼をして問答にかかります。

「愚僧は越前の国永平寺沙弥托善と申す。諸国行脚の僧でござります。修行の

仏教と話芸

為に一問答致したく存じます」

左右に障子を開く、寺は古いが曠々として高麗縁のうす畳みは、雨漏りのために茶色に変じ、狩野法眼元信の描きしかと怪しまれる格天井の一匹籠。鼠の小便のために胡粉地のみに相成り。幡天蓋は引き裂かれ、朝風に翩翩と翻り、正面には釈迦牟尼仏、左に曹洞禪師、箔を剥がし、一段前に法壇を設け、一人の老僧、頭に、帽子をいただき、手には、扠子を携え、眼半眼に閉じ、坐禅觀法寂寞と控えしは、当山の大和尚とは真つ赤な偽り、何も知らない蒨蕪屋の六兵衛さん。「一不審もて参る 法華經五字の説法は八遍に閉じ、松風の二道は松に声あるや、松また風を生まんや？、有無の二道は、禪家悟道の悟にして、何れが理なりや非なりや？ 大和尚、この義如何に？ ……この義、如何に？」

（何ゆうてるか…：勝手に喋てろ）

「いま 一不審もて参る 法華經五字の説法は八遍に閉じ、松風の二道は松に声あるや、松また風を生まんや？、有無の二道は、禪家悟道の悟にして、何れが理なりや非なりや？ 大和尚、この義如何に？ ……この義、如何に？」

(何ゆうてるか…勝手に喋てろ)

「いま一不審もてまいる。法海に魚有り、尾もなく 頭も無く、中の支骨を断つ この義いかにお答えッ 説破せつぱ」

(何がだ 喇叭らっぱもちゃぱも有るか。ぐずぐずしてるとお前、煮え湯ぶっかけられて、むこう脛すねかつぱらつてしまっうぜ、帰れ早や、帰れ！)

何をゆうてもお答えがない。旅僧が根負けを致しまして、

「ははあ、これは荒行のうち無言の行と心得る。無言ならば我も無言にて」

と、旅僧(沙弥托善)が、両手の人差し指と拇指でをあわせて、丸い輪をつくり、胸のあたりで抱えて、これを、うんと前で押し出すように示す。

と、当山の大師和尚(蒟蒻屋六兵衛)は、それを見て、ぶつぶつ言いながら、両手で大きな丸の輪をつくり、仰け反りかえる。

旅僧は、それを見るなり、平伏して、今度は、両手を広げて、十本の指を前に差し出す。

蒟蒻屋六兵衛が、それを見るなり、右手を開いて、五本の指を前に差し出す。

仏教と話芸

再び、旅僧は、左手の拇指と人差し指で輪をつくり、上にかまえて、右手で三本の指を立てて仏像のような格好をする。

蒟蒻屋六兵衛が、それを見るなり、大きく唖に手を当てて、あつかんべいをしてみせる。

（旅僧が）「恐れいりました」

「おいおい、お前何してんだ。本堂で狐拳きつねこぶしのようなことして二人して何してんだ」

「恐れ入ります。当山の大和尚は博学多才」

「何い？ のこのこささいさい？ どうでもそんなこといい。どっちが問答勝ったんだ」

「恐れ入ります。最初に二言三言お尋ね致しましたけれども、当山大和尚お答えがない。ははあ、これは無言の行と心得え、無言ならば愚僧も無言にて、最初に「大和尚、お心の内は？」と尋ねましたところ、「大海の如し」とのお答え。真にもつてもう一問と思い、「十方世界」と尋ねれば、「五戒で保つ」とのお答え、及ばぬながらも一問、「三尊の弥陀は？」と問えば、「目の下にあり」とのお答

え、到底、愚僧の及ぶところではござりませんので、西三年修行致しまして、改めて推参致しますので、よろしく御前に御取りなしを」

「なんやって、お前、負けたのか。あつはつは……。あのな、お前ぐずぐずしてると頭から煮え湯ぶっかけられて、湯がかれてしまう。帰れ、帰れ」

「おお、おい、おい！」

「なんだ、なんだ、慌てて帰りおつて。真っ青な顔して帰るんだから。何だお前。おいおいおい、ちょっとお前、そこらへんに坊主があつたら言うていけや。

あのな、あの寺行つたつてなあ、問答にこないつこないから、問答等には行かずに、やめとけと言付けておいてくれ。何だうちの親分も問答できるなら、一言ゆうてくれればこつちも心配しなくてもいいのに、ああ、どうも。親分、どうも」

「何してんだ、お前。頭から湯気出して片肌脱いで」

「だって問答に負けたで。アホぬかせ。オレが問答なんてできる訳ないがな。ええ？ あの野郎何て言つてた？ 越前永平寺なんてウソばかりゆうて。このへんほつつき歩いてる乞食坊主だ、あいつ。オレが蒔蕪屋のことを知って

仏教と話芸

た、あいつ。あの野郎最初、オレの顔、ジーツと見て、やがてオレが蒟蒻屋の親父ということがわかったもんだから、あの偽坊主が知らねえけど、「お前のこの蒟蒻、こんなに小さいか」って聞くんだよ。手つきでケチつけやがる。「オレんとこの蒟蒻こんなにでかい」と言うたらな、今度は「十丁でいくら」と聞きおった。少々高いと思っただけだな、「五百にまけとく」と言ったらな「銭がねえから三百にまけて」と言いやがる。冗談じゃねえ「あっかんべえ」とやってやった。

落語とお説教の根っこ

これが「蒟蒻問答」です。これ、結構、仏教用語が入っていて難しいんですよ。禅宗のお坊さんは、宗教的に「十方世界は五戒で保つ」とこう解釈したんですね。ところが蒟蒻屋の六兵衛さんは「十丁でいくらだ」と解釈して、「五百だ」と答えた。「三尊の弥陀は」と禅宗のお坊さんは問うたんだけど、蒟蒻屋の六兵衛さんは

「銭がないから三百にまけて」ととって、あっかんべいをしちゃうんですよ。それを、禪宗のお坊さんは「三尊の弥陀は？」という問いに対する、「目の下にあり」という答えだと解釈しちゃうんです。

これが、この落語のオチです。いろいろな仏教の言葉、三尊の弥陀とか十方世界とか、語彙をきちんと知ってなきや、こういう落語は理解できないですよ。江戸時代の人々はそういうことを、落語とかお説教とかを聞いて知ってみえたんですよ。だからこういう落語の話が自然と人々の中に入っていったんです。

一番最後のオチなんか、今でも考えさせられますよね。我々人間は言葉を使う動物だと言ってますけれども、果たして、自分の思いが伝わってますか。あるいは相手の言葉をきちんと聞いてますか。そういう大きな問題が、この落語のオチにあって、非常に意味が深いなあと思います。

今日やらせていただくのは、「加典かてん兄妹」という節談説教ですけれども、これも鐘の音色がゴーンと聞こえる人もいれば、その同じ鐘の音色が「南無阿弥陀仏」と聞こえる人もいます。そういうことをテーマとして語ってるんです。「南無阿弥陀仏」のた

仏教と話芸

だの六字ですが、それを我々がそれぞれのように心得るか、あるいは解釈するかによつて違つてくる世界がありますよ、ということをも、この節談説教も問うていると思います。だから、今は落語は面白おかしいことばかりを強調しちゃうから娯楽になつてしまふんだけど、落語と節談も根つこの部分では一緒なんです。

知つてゐることを知らないと言つてみたり、あるいは自分勝手な解釈をして、面白おかしく話が進んでいくなんてことがたくさんありますよね。落語には読み書きができない人の話がたくさんできてきます。「無筆むひつの犬」とかね「三人無筆」とか。「お前さんこれ読んでくれ」と手紙を持ってこられると、無茶苦茶に読むんですよ。いままら、読めないと言えないから読めるふりをして読むんですよ。何か薄文字で書いてあるから人が亡くなったにちがいないと。そこで、「お前んとこ亡くなった人おるか」と聞くんですよ。でもそれは、実は裏向けで手紙を見てるんですよ。今でも、会葬のお札などは薄墨で書きますよね。そういう知識も、やっぱり落語を通じてみんな知つてたんですよ。昔は落語とかお説教を通していろんなことを学んだんですよ。

節談説教「加典兄妹」（「エミレーの鐘」）

私が、節談説教をやり始めようというキツカケになった素晴らしいお説教がありました。廣陵兼純先生の「加典兄妹」というお説教です。このお説教には、自分の子供を犠牲にする場面があるのですが、僕らの仲間でもこの話は、幼児を虐待する話しだと、あるいは人を殺すような話はいくつかの批判もあるんですけども、しかし、僕らの歴史を眺めてみると、人間の命によつて新しい時代ができたということも事実なんですよね。歴史で習った、遣隋使とか遣唐使は、日本からたくさん行ったり来たりしますよね。最澄とか空海もそうですよね。あるいは鑑真和尚も何度も何度も日本に来ようと思つてその度に難破して、最後には目が見えなくなった。十何艘かの船団を組んで東シナ海を渡るんですけども、向こうに着くのは一艘か二艘です。そういうところから仏教も入つて来たんですよね。その中で、ものすごい人が犠牲になったんですよね。そのお陰で仏教も入つてきましたし、いろんな文化も入つてきたという

仏教と話芸

ことを忘れちゃいかんと思うんですよ。

私の故郷の愛知県には、毎年旧暦の一月の十三日に国府宮ここのみやの裸祭りというのがあります。神男しんおとこという役があつて、その人の身体を触ると、その人が自分の厄を持つていつてくれるんです。だけでも触られたその神男は、考えてみれば全部の人の悪いバイ菌をつけてるわけですよ。そのバイ菌つけた人を世の中に放つたら、余計まん延しちゃうじゃないですか。昔はその神男の人を本当に殺したんです。そういう行事もあつたんですよ。

今でも、例えば、通り魔事件があると、何センチ以下のナイフは販売禁止と、人が殺されて初めて規制ができます。交通事故で悲惨な事故が起きると、新しい法律ができるように、そういう人の犠牲というか、命の上に尊い次の時代が作られてきたというのを、そういうことも考えて頂きたいなということで、最後に、節談説教をやつてみます。

仏智の不思議をはからうべきにあらず　まして凡夫の浅智せんちをや。かえすがえす

如来の御ちかいに まかせたてまつるべきなり。これを 他力に帰したる信心ほつじん発得の行者とはいうなり。されば われとして浄土へまいるべしとも また地獄へゆくべしとも 定むべからずと（『執持鈔』）

今日もまた 露の命を存ながらえさせ 仏の法を聞くぞ うれしき 存ながらえがたき命を存えさしめ頂き 今日もまた 弟子に來いとの 呼はり声のしたいと 引き出さしめ頂きました事を 深く喜びつつ 暫くの間 ご相談をさしめ頂く次第で御座います。

かの宮川の妙忠尼と言う人が 臨終の時に 申されたお言葉では御座いますが 私は 一生涯 信心欲しい 信心欲しい と 信心取ることに 長い間かかり果てたけれども とうとう最後まで 信心下されなんだ 信心下されただけれど不足の言われんお六字 一つを与えて頂きましたことによって 生まれ出いを さしめ頂いた事を 喜び喜び往生を遂げられたのが 宮川の妙忠尼と言うお方で御座

仏教と話芸

いました

所謂 信心と言うも 安心あんじんというも、六字を離れて 信心もなければ 安心もないので御座います。今までは 不足の言われんお六字を 遠い世界で眺めてまして 六字のほかに 信心がなかるうか？ 安心がなかるうか？ と尋ねておりました。六字のほかに信心が 有るまでもなければ 安心が有るまでもない 六字一つが 聞其名号もんごみまうごうと我がものとさしめ頂くのが ご当流の信心獲得しんぎやくとくの姿で御座いますと 懇ろねんじょに 知らしめ下された次第で御座います。

さればこそ 八代目の蓮如上人さまは 百なるものは 十につづめて 十なるものは一につづめて ごねんごろに お知らせ下されたのが あの 信心獲得の御文さまで御座います。

いとも 懇ろねんじょに まず最初には 問題をお出しなされまして

「信心獲得すと言うは 信心獲得すと言うは 第十八の願をこころうるなり この願ねがひこころうると言うは、南無阿弥陀仏のすがたをこころうるなり」

南無阿弥陀の六字のすがたを心得るんじやと、知らしめ下さいました。

しからば お六字さまのおすがたは どんなすがたがあるかいなと言うたら、お六字さまのおすがたは 千相・万相・億相・恒沙相・無量相・無辺相 四辯八音 大小世尊のような み仏が 広河のいなもの その数ほど集まりまして 読んで 読んでも 読み尽くす事のできない 広大なすがたが 南無阿弥陀仏の六字のすがたで御座います。

されば 御開山も 四句一念の ご和讃に

「百千俱胝の劫をへて 百千俱胝のしたをいだし したごと無量のこえをして 弥陀をほめんになおつきじ」(「浄土和讃」)

「百千俱胝の劫をへて 百千俱胝のしたをいだし したごと無量のこえをして 弥陀をほめんになおつきじ」

とてもとても 褒め尽くされないのが、南無阿弥陀仏の六字のすがたなり

しからば そんな広大なお六字さまを愚鈍なわたくしどもは いかに心得るのでしょうかと言うたら？ 開いてみれば 無量無辺のすがたなれども おさめて

仏教と話芸

みれば 名号十相と云うて 十通りのすがたに おさまるぞ とごねんごろに
知らしめ下さいました。

さあ どんなおすがたに おさまるのでしょうか？

一つにおいては 大悲召喚のすがた

二つには 機法一体のすがたなり

三つには 願行具足のすがたなり

四つには 萬善総体のすがたなり

五つには 往還廻向おうげんえこうのすがたなり

六つには 名体不離しんたいふりのすがたなり

七つには 信樂具足しんがくのすがたなり

八つには 往生治定のすがたなり

九つには 証誠護念しんじやうごねんのすがたなり

一〇には 一念大利いっねんたいりのすがたが 南無阿弥陀仏の六字なんむあみだぶつのすがたなり
名号十相と云うて十通りのすがたにおさまる。

まず第一には 大悲召喚のすがた と言うのは あなたの呼び声まきが その仮
南無阿弥陀仏の六字のすがたや 我を頼め 必ず救う親が ここにおるわいやと
たとえ罪業は深重なりとも 必ず弥陀如来は 救いますすべし
作りし 罪咎とが消してやる。 持たん功德は 与えてやるわい。

聞いて忘れる 覚えておれん凡夫 骨の髄から 血綿の底 第八阿羅耶識のど
ん底まで 見て見て見抜いた親やぞえい。

あなたの呼び声まきが その仮 南無阿弥陀仏の六字のすがたや

今から千三百年前もの まく古いお話で、総じて朝鮮と呼んでいた時代、所は
慶州におきました その国の大王がお亡くなられ、そこで大王菩提のために 梵
鐘供養の発願をし、朝鮮全土にわたりまして 釣鐘造りの名人がおるまいか？
と くまなく探された その時に、たまたま 朝鮮の桂城に 加典と言う釣鐘造
りの名人がおられた。

この名人 お呼び出しにあずかり 慶州の都へ上られた その時に 大王

仏教と話芸

「遠路わざわざご苦勞であつた。父大王菩提の為に 梵鐘供養の發願をし 汝ひとつ腕をふるつて 幾千万の後までも 鳴つて鳴つて鳴り渡る 名鐘を造つてくれや」

むろん 加典名人 一生一代の光榮なりと 感謝感激をいたしまして さつそくおば 釣鐘造りの仕事におお とりかかりましたが ところが 皆さん方 名人氣質と申しましようか せっかく出来上がった鐘 こいつ気にくわないと言つて 壊してしまい 壊しては造り 造りては壊し こうした事を 幾たびとなく繰り返しているうちに 加典名人 極度の神経衰弱になつてしまわれた。さらに仕事をしようとしないで 毎日毎日 やけ酒ばかりを あおつて日を送つておりましたが 一方 王様の方からは 矢のような催促で御座いますが

「いつになつたら鐘が出来るじゃい いつになつたら釣鐘が出来るんじゃいか」と 重ね重ねの催促なれども 加典名人 一向に仕事に取りかかろうとしない。相も変わらずやけ酒ばかりを あおつておりました。月日のたつものは 早いもので 二年三年 夢の如くに過ぎ 早五年になりますけれども 釣鐘が出来そう

にもない。相も変わらずやけ酒ばかりで 御座いました。

話変わりまして この加典名人には 一人の妹さんおいでなさって で この妹さん 他所へ嫁いでいおったんで御座いますが 不幸にして夫に死に別れ 幼気なる小娘一人を引き連れまして 泣く泣く兄の元へと 帰っております。

「お兄様 お願いで御座います 世間では お兄様の事を 色々 悪事雑言さまざまな事言うておりますが どうか 一日でも早く 釣鐘を造つて下さい 仕上げてください。私も 只今から出来うる限りのお手伝いは させてもらいます故に」

兄には激励はしてみましたところ あいも変わらず やけ酒ばかりを あおつてばかりいました。

ある時のことで御座いましたが 今の妹さんが 角に立ちまして それとなく道行く人を眺めておりました その時に そこへ四・五人の若い者が通りかかり 加典の工場を眺めながら

仏教と話芸

「なんだいこれが 加典の工場か！ 名人じゃなんて 大きなふれこみをしやがって ここへ来て 一体何年になるいつになったら鐘が出来るじゃ 名人なんて 聞いてあきれるわい」

と嘲り笑うて通つて行く。これ聞かれた妹さん 悔しいやら 悲しいやら 涙ながしておりましたが、そこへば 又四・五人の若い者が通りかかり 加典名人の工場を眺めながら

「これが 何が加典名人の工場か 名人であろうが 何であろうが 年は取りたくはないものだ。「麒麟きりんも老いれば驚馬とばにも劣る。」こりゃ釣鐘は出来そうにはないわいな！」

嘲り笑つて通つて行く。これ聞かれた妹さん ますます悔しいやら残念やらで涙流しておりましたが、そこへ一人の白髪はくぱの老人が 悄然と通りかかり 誰に言うとも無く 語るとも無く

「気の毒なのは加典じゃが。昔から言われておる 立派な鐘を造るときは 人柱を立てねばならぬ。加典はこれを 知らないのだろうか？」

これを聞かれた妹さん 暗夜に灯火ともしびを得た気持ちで 思わず 知らず 奥の一
間へ飛び込んで参りました

「お兄様 鐘が出来上がりましたぞ 釣鐘が出来上がりました！」

「お前 気でも狂うておるのではないか？」

「いや 違います！ お兄様。私は今 この耳で聞きました。人柱を立てたならば 立派な鐘が出来ると聞きました。お兄様 一日も早く人柱を立てて 幾千万の後までも 鳴って鳴って鳴り渡る名鐘を 造って下され」

「妹 人柱を立てて 立派な鐘を造る それくらい事は この兄とても 知っておる 承知じゃ」

「では お兄様 一日も早く人柱を立て 幾千万の後までも 鳴って鳴って鳴り渡る名鐘を 造って下され」

「妹 お前 最前から 聞いておれば 人柱 人柱と言うておるが 一体 誰を人柱に立てるつもりかい。この兄は 権門けんもんの奴隷でもなければ 売名の輩でも無い。尊い人の命を犠牲にしてまで 釣鐘は造りたくないのだ。だからこの兄は

仏教と話芸

迷うておるのだ」

「お兄様 一日も早く人柱を立て 幾千万の後までも 鳴って鳴って鳴り渡る名鐘を造つて下され」

「妹 だから一体お前は 誰を人柱に立てるつもりなのか？」

言われたその時に 「兄さんご覧下さい」と 指さされた方を眺めれば 今年五つになる その幼気なる小娘で御座います。

「お前気でも狂うたのではないか？ あの子は お前にとっては たった一人のかわいい子供じゃ。亡き夫の 忘れ形見。はたまたこの身にとつたところで たった一人のかわいい姪の子じゃ。どうしてあの子をば 殺す事できようか？ 人柱に立てる事が出来ようか？」

「いいえ お兄様 殺すんじゃないやありません。殺して 生かいてやって下さい。大菩薩堤の為に あの子をば 人柱に立て 幾千万の後までも 鳴って鳴って鳴り渡る名鐘を造つて下されませ」

眞実まことを込めての妹さんのこの言葉なれども 加典名人 なかなかはじめ

のうちは　そう言う事は　とうてい出来ない　なかなか受付ようとはしませんでしたが　再三再四の真実まことを込めての妹さんのこの言葉に　遂に意を決しまして

加典名人

「それほどまでに言われるならば　可哀相ではあるが　不憫には違いはなけれど　も　あの子をば　人柱に立て　幾千万の後までも　鳴って鳴って鳴り渡る名鐘を造ろうぞ！」

やがて　芸術家本来の姿にかえりました加典の工場からは　紫の煙が　延々と燃え上がってきました。

今　くだんの妹さん　我がかわいい小娘をば　白衣に着替えさせ　手には　赤い珠数一輪を持たせ

「何も言わずに　一足先にお父様の所へ行ってください。お父様のところには　この母さんより　もっと　もっと　あんたをかわいがって下さる　真実の母さんが待っていますよ！」

仏教と話芸

諄々^{じゆんじゆん}と我が子に言い聞かせ 解つてか解からないのか 知らねども くだんの小娘は 素直にこれを聞いておりました。だんだんと時も過ぎ やがて準備万端が整えられてまいります。

今 紫の煙をはいた 溶銅が とうとうとうと 型の中に流し込まれている
その時に 加典名人 「しからは 妹 堪忍してくれや 小娘堪忍してくれや」
と 心の内

今 くだんの小娘をば 紫の煙をはいた 溶銅が とうとうとうと流れている
その型の中に 今 くだんの小娘をば 小脇に抱えて パツと投げ込んだ瞬間
一言

「かゝあさん」

かゝあさんと言ったが 最後に はや 既に くだんの小娘の姿は そこには
見えない。さすが気丈な加典兄妹 その場にはつたと 打ち倒れてしまいました
が これではならじと 釣鐘をば 仕上げて せめてもの思い出にと 釣鐘の横

の方に 小娘の姿をば 彫り込んでいったのであります。

こうして 釣鐘が 見事出来上がり 慶州 幾十万人々が 深い眠りにとだされておる時に ゴーンとばかりに鳴り出しました。今まで眠っていた者も 笑っていた者も そしっていた者も 思わず この鐘の音に目を覚まし 思わず 起きあがり合掌せずには おられなかった。その時 加典兄妹は どうしていたのでしょうか？

「おーおー 鐘よ 鐘よ 鳴ってくれ！ 命の鐘やない 血の鐘やない 数年間のその間 心骨そそいだこの鐘じゃもん！ かわいい かわいい小娘までも 犠牲にしたこの鐘じゃもん 鳴って鳴って鳴りわたり 仏はとけの声を出してくれよ！」

今日は いよいよ 梵鐘突き初めの日。時は 十二月八日（＝お釈迦さまの悟られた日） 加典兄妹は 朝早くから 鐘樓堂のところに参加して 今か 今かと 突き初めの式を待っていました。

だんだん雪が降ってきました。加典兄妹 雪に埋もれて いよいよ 時も過ぎ

仏教と話芸

第一声が ごうんと ばかりに鳴り出しました。

「おーおー 鐘よ 鐘よ 鳴ってくれ！ 命の鐘やない 血の鐘やない 数年間のその間 心骨そそいだこの鐘じゃもん！ かわいい かわいい小娘までも犠牲にしたこの鐘じゃもん 鳴って鳴って鳴りわたり 仏ぼんの声を出してくれよ！ これ鐘よ！」

またもや 突き出さるる鐘。その時 加典名人 妹さんに向かいました

「どうや 妹よ！ あの鐘の音が 聞こえるかいや」と尋ねられた その時に

「いいえ何も聞こえません」

「そうか お前には あの鐘の音が聞こえんかい！ この兄にも 聞こえないあや」

またもや 突き出される鐘。

「どうじゃ妹 聞こえるかい！」と尋ねられた

「兄さん 何も聞こえません」

「お前もか！ この兄にも 聞こえんかい」

「またもや突き出される鐘 「どうや妹聞こえるかい？」と尋ねられた その時に

「兄さんや 兄さんや 最前から聞こえてくるのは ただ 最後の「かゝあさん」と言う呼び声より ほかはなかつたゾ！」

「えゝお前もそうか？ ほんに 最前から聞こえてくるのは ただ 最後の「かゝあさん」と言う呼び声より ほかはなかつた。心ない人 聞いたならば 良い鐘の音やな 良い鐘やな と聞くかは知らねども 我々に 兄妹に 聞こえてくるものは ただ最後の一声 「かゝあさん」と言う呼び声より ほかはなかつたゾエ！」

さあ こうした 奇しき因縁を示しているのが 朝鮮 慶州の新羅の鐘

今も 丁度 その如く 書いて六字の南無阿弥陀仏 称えたならば 半口にも

仏教と話芸

足らぬ名号六字に違いはなけれども この南無阿弥陀仏のお六字さまは 弥陀の五劫の間の 血のかたまりやぞや。兆載永劫の肉の固まりが 南無阿弥陀仏の六字の姿なり。

内部感覚の心の内を 澄まして聞いて下さいませや。

一声一声が 唯 衆生かわいやな 衆生かわいやな 衆生かわいやな 衆生かわいやな 衆生かわいやな 衆生かわいやな 衆生かわいやな 衆生かわいやな 衆生かわいやな 衆生かわいやな

あらゆる衆生世界の苦しみは この法藏が身の上に乗まれぞかしや。五道六道のちまたは 法藏が身の置きどころわいやと。

ぐらぐらと煮え立つ熱湯の湯玉は 法藏が飲んで 謝つてやるわいなと。

いわみる様な 牛頭馬頭ゴザメザ 阿傍羅刹アボウラセツは 法藏がをば攻めよかし。

おれは 苦しむはずじゃない 衆生は楽を得ざるはず。

剣の山は 俺が行く

七宝のうてなは 衆生の住処すみかやぞと

さんざんに お体にも代え お命にも代えて ご成就くだされたのが 弥陀の

本願 南無阿弥陀の六字なり

南無は願なり

阿弥陀は行なり

南無は恃たのむ機なり

阿弥陀は 助けくたもう法なりや

恃む機も あんたからやな

助ける法も あんたからやぞ

恃む役にもなられたり

助ける役にもなられたり

願も 行も 機も 法も 共に一体 ご成就あらせられ

信の一念が 願行具足や

かかるもの事 請けこんだところで 凡ほんに如一致

行者が本願や 本願が行者や

参る 参る と言ったとて 参らさいでなんとしよう

仏教と話芸

死出の山道は 本願の駕籠なら 三途の大河は 弘誓くぜいの舟や

右も 左も 光明摂取 他所よそへ逃げ道あらばこそ

向かうところは 安養あんじょうの浄土へ

迎えとりやなおかん の呼び声が

南無阿弥陀の六字となり とく

どうにも こうにもならん 心の奥底へ 我を頼め 必ず救うの親の呼び声が
鳴り届いてくだされたのが ご当流の 雜行を棄てて弥陀如来を侍むの 一拝で
は なかろうかと 頂戴をさせて頂く次第ではなかろうか とく

おわりに

この「エミレーの鐘」は、韓国のお話です。中国の話、日本の話、インドの話、韓
国の話、いろんなものを取り入れながら布教したんですね。「エミレーの鐘」は、

韓国のソウルでオリンピックがあつた時に、最初にゴーンと打ち出されたんですよ。一三〇〇年前に加典兄妹が願いを込めて作った鐘が、人々の平和と幸福を祈るオリンピックの大会で、ゴーンと全世界に衛星中継で流れるのを見て感動しました。

お寺で住職をやつてますと、いろんな人の生き死にを見てきます。まだ三歳か四歳の子なんですけれども、お父さんが亡くなって、私がお父さんの小さなボクに聞いたんですよ。「お父さんが亡くなって寂しいねえ。ボクは何のために生まれたの」と言つたら、こう言つたんですよ、その子が。「僕はお母さんに会うためにこの世に生まれました」と。まさしくそうなんです。仏様から見れば、皆さんに会うために仏様は生まれてみえたんですよ。そして自分は、仏様に会うために生まれてきたということ、こういうお説教を通じて、昔は語り継いだんです。こういう真宗において受けついできた節談説教という、立派な文化と言いましょいか、伝統というものがあるということ、心の中に留めて今日はお帰り頂ければ、私も京都まで来た甲斐があつたんではなからうかということを申し上げて、終わらせて頂きます。

どうもありがとうございます。

仏教と話芸

参考音源

※六代目 三遊亭圓生 名演集 四 「こんにやく問答」 ニッポン放送・東宝ミュージック

※ドキュメントまた又「日本の放浪芸」節談説教せだんく小沢昭一が訪ねた旅僧たちの説法 ビ

クターエンタテインメント

参考文献

※関山和夫「説教の歴史 仏教と話芸」白水社 一九九二

※関山和夫「庶民芸能と仏教」大蔵出版 二〇〇二

※関山和夫「落語風俗帳」白水社 二〇〇一

※関山和夫監修、谷口幸壺著「節談はよみがえる」白馬社 二〇〇四

※直林不退「節談椿原流の説教者」永田文昌堂 二〇〇七

※麻生芳伸編「落語百選 春」ちくま文庫 二〇〇六

——二〇〇八年六月二十七日——